

6) スノー・ドロップ

スイセンと同じヒガンバナ科の多年草にスノー・ドロップがある。英語では『Snow drop』で雪の雫を意味する。アダムとイブがエデンの園を追われたとき、降りしきる雪にイブの手が触れると、天使がその雪をスノー・ドロップに変えたと伝えられている。日本ではユキノハナとか松雪草、待雪草ともいわれてきたが、ヨーロッパから西南アジア付近が原産地で、日本に渡来したのは明治初期のことである。

この花の特徴は何といっても陽なたよりも半日陰ぐらいを好むことと、芳香のあることである。したがって落葉樹の下であるとか、大きな庭であれば岩陰などに植えておくと、なんとも可憐でいかにも清楚である。夜には花を閉じてうなだれるような姿になる。花言葉も『希望と慰め』で、早春、他の花に先がけて開花することから、2月2日の『聖燭祭』(聖母マリアの御潔めの祝日)の花ともいわれ、純潔の象徴として古くは修道院などで栽培されてきた。1998年8月に不慮の事故死を遂げた英王女ダイアナの夫チャールズの『Wood land garden』(森林の庭)では、この花が森の落葉樹の下で毎年見事に咲き揃う。英国ではスノー・ドロップは、真っ先に春を告げてくれる花として、人々から愛されており、イギリスの著名な女流園芸家であった故ローズマリー・ヴェレイのアドバイスで、この花を庭いっぱい植えたのだという。スノー・ドロップが樹の下に一面に咲くさまは、春の女神が群舞するようで美しい。しかし別の伝説によると、ケルマという乙女が恋人の死に際して、この花を摘んで恋人の傷口に置いたところ、死者の肉体は雪の片になったと伝えられ、スノー・ドロップは死を象徴する花になった。このためイギリスの田園では昔から、死者がまとう屍衣(シエ)を連想させる花として嫌われ、家の中に持ち込むと不幸が起こると信じられてきた。英語では『snowdrops wear shrouds』といわれているが、『shrouds』とは屍衣、『経帷子』(キョウカタビラ)のことを意味する言葉なのである。この俗説がはからずも現実のものとなって、ダイアナが事故死したことを考えると、なんとも皮肉な巡り合わせだったというべきだろうか。チャールズはイギリスの昔ながらの田園風景をこよなく愛し、あちこちの別荘でも自然保護に力を注いでいることでよく知られている。また水彩絵具をたくみに使って、イギリスの田園風景をもののみごとに描いたり、郊外の別荘で田園生活をエンジョイし、いかにも英国紳士らしく自分の筋を通して。一方若い頃からあちこちに留学していたとはいえ、田舎育ちで都会志向の強かったダイアナと、都会育ちで田舎志向の強かったチャールズと、このカップルは最初から最後まで、数奇な巡り合わせだったのかも知れない。

スノー・ドロップの育てかたは簡単で、東京あたりでは多少暑がるものの、陽なたをさけて植えることに心がけ、数年に一度ぐらいの割合で堀上げて分球し、堆肥などを十分にすきこむようにすれば、毎年春に先駆けて可憐な花をたくさん咲かせてくれる。酸性土よりアルカリ土を好むのは他の球根植物と同様である。



楚々とした花が魅力的なスノードロップ(東京都小平市薬用植物園)。



春先、疎林中の陽だまりで純白の花を次々と、まるで白いチョウチョのように開花するスノードロップ。目立つ花ではないが、自然を追求する庭に良く似合う(小平市薬用植物園)。



スノードロップはまるで手のかからない球根草である(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)